

教団エキュメニカル協力奨学金

第3回国際関係委員会

五月二〇日に第三回国際関係委員会が開催された。今回の委員会において、日本基督教団エキュメニカル協力奨学金の交付学生の選定を行った。本奨学金は、世界宣教委員会が宣教協力協議会（COC）奨学金を引き継いだものである。かつてCOCは北米の教会の協力を得て留学生奨学金制度を設け、多くの日本人を北米の大学へと送り出した。その後、奨学金の対象を日本におけるアジア諸教会からの留学生へと改め、COC奨学金制度を設立した。しかしながら、JNACCとCOCの解散により、日本基督教団世界宣教委員

会がこの奨学金基金を引き継ぎ、本年度より「日本基督教団エキュメニカル協力奨学金」としてその運用を開始した。本委員会がその実務にあたっている。本年度は、五名の応募者があった。全員に交付したところであるが、原資に限りがあり、長く運用することを願うため、残念ながら二名を選考しなければならぬ。本委員会において、経済状況や宣教協力への志を判断基準とし、韓国入一名とフィリピン入一名に奨学金の支給を決定した。先述のように原資に限りがあり、補填されることがなければ数年で支給できな

くなってしまう。ぜひ、本奨学金の趣旨を「理解いただき、多くの献金が寄せられることを願っている。現在、ドイツの南西ドイツ宣教会は、日本基督教団を含む世界のパートナー教会から青年を半年間ドイツの教会と幼稚園に実習生として受け入れるプログラムを提供してくれている。本委員会も実習生を公募し、積極的に送り出したいと願っている。このように、宣教協力において人的交流は本当に大きな役割を果たすものである。国際協力関係を充実させるために、人的・財政的にもぜひ協力いただきたい。（中道基夫報）



プロジェクターを用いて選挙結果報告

第67回東京教区定期総会が出席した。今回、懸案では、五月二七日、東京山手教会で開催され、正議員五〇二人中、開会時三〇三人が出席した。今回、懸案では、五月二七日、東京山手教会で開催され、正議員五〇二人中、開会時三〇三人が出席した。今回、懸案では、五月二七日、東京山手教会で開催され、正議員五〇二人中、開会時三〇三人が出席した。

グドロン・シェーア宣教師（西千葉）による開会礼拝の後、組織会、続いて来賓挨拶を受けた。在日大韓基督教会関東地方会の洪性完会長は、関東地方会の中で最も密に重なる東京教区総会に初めて来賓として挨拶する意義を述べた。

続いて、教団問安使内藤留幸総幹事は、山北宣久教団議長との挨拶文をもとに、重要課題を指摘しつつ挨拶した。その他、出版局より有澤福年局長、年金局より高橋豊理事、事務局より愛澤豊重総務幹事がそれぞれ挨拶した。

質問用紙の事前提出を受けての質疑では「未受洗者第一選挙と第二選挙（支区別選出）の定数配分のは正を求めた議員提案が審議されたが少数否決となり、原案通り選挙が行われた。総会資料に過年度負担金未収状況が教会名も含める形で初めて公表されたことを受け、議長報告をめぐる審議の中で意見が出された。

また「信愛荘」と「にじのいえ」の合併に関する件が審議され、賛成多数で承認された。今後、合併主体の双方から委員を出し、必要な専門委員会を立ち上げ前進させることとなった。

尚、北支区より提出された、教区定期総会ごとに支区報告を口頭で行う件、支区長の教区常置委員会陪席に関する件は、審議の後いづれも少数否決となった。

夕食休憩後、教団総会議員の第二選挙の結果承認以外、全ての審議を終えていることをふまえ、選挙結果報告を三役と選挙に委ねる

「信愛荘」「にじのいえ」合併準備

東京

ことが議運より提案され、昨年に引き続き一日目のみで総会を終了した。常置委員半数改選結果【教職】長山信夫（銀座）、野村和正（長原）、米倉美佐男（聖和）、古屋博規（小石川白山）、松下恭規（芝）【信徒】棟居正（柿ノ木坂）、朝岡瑞子（船橋）、永井清陽（経堂北）、岡田義信（田園調布）、持田二郎（池袋西）【教職】長山信夫（銀座）、木下宣世（西千葉）、橋爪忠夫（洗足）、倉橋康夫（富士見町）、張田真（鳥居坂）、米倉美佐男（聖和）、長崎哲夫（東京山手）、古屋博規（小石川白山）、小橋孝一（新島）、田村博（田園調布）、松下恭規（芝）、山北宣久（聖ヶ丘）、石井錦一（松戸）、藤田義哉（玉川平安）、中村征一郎（東金）、深井智朗（滝野川）、東海林昭雄（小松川）、竹井真人（波浮）、岸俊彦（経堂北）、佐野英二（安藤記念）、勝田英嗣（柿ノ木坂）、長津栄（高輪）、銅谷恵一（根津）、亀岡頭（本郷中央）、岸憲秀（千葉本町）、眞嶋威（新津田沼）【信徒】池田浩二（墨南坂）、川上郁夫（西新井）、棟居正（柿ノ木坂）、鈴木功男（目白）、鈴木優子（小松川）、朝岡瑞子（船橋）、永井清陽（経堂北）、岡田義信（田園調布）、持田二郎（池袋西）、吉池光（九段）、樋田利明（富士見町）、鈴木秀信（船橋）、岩澤高（銀座）、松本幸恵（聖ヶ丘）、奥山盾夫（千葉本町）、澤田竹二郎（白金）、笠原康子（銀座）、丸尾時彦（波浮）、石渡伸一（聖徒）、小平正宣（代々木中部）、飯島弘（長原）、柴田嘉浩（高輪）、岩崎文子（年込弘方町）、塩島光三（小石川白山）、石井信満（長生）、山下雅紀（青堀）（林牧人報）

三国間協議会2010年11月開催へ

第3回スイス協約・韓国協約合同委員会

第35総会期第三回スイス協約委員会と韓国協約委員会の合同委員会が、両委員会全員出席のもと、五月二二日（木）午後十六時から十七時、教団会議室で行われた。上田幹事より二月に行われたミッション21アジア部会常任委員会に出席のおりかねて開催を打診されていた、スイス・韓国・日本三国間教会協議会を日本にお

消息

有田 實氏（隠退教師）



二月一日、逝去。九四歳。鳥取県に生まれる。一九四〇年同志社大学神学科卒業。後、めぐみ教会に赴任。その後、高梁、吉備、用瀬、湖山、智頭、鳥取西部、各教会を牧会し、六六年から七八年まで湖山教会を牧会し、九八年隠退した。遺族は、息の齊さん。



市川恭三氏（隠退教師）五月三日、逝去。九九歳。

事務局報

教師異動

富山新庄 就(主)坪内克浩
愛北 辞(主)新洲千枝子
大津 辞(主)望月修治
曾根 就(主)江守秀夫
就(主)真下 潤
甲子園二葉 辞(代)山崎征夫
就(主)元 正章
宇部緑橋 辞(主)戸井雄二

岩槻	就(主)川中 真	大町	辞(主)下田尾治郎
江古田	辞(代)荒川純太郎	赤池	辞(主)小林 茂
信濃町	就(主)荒川純太郎	京都	辞(主)伊藤大道
新松戸	就(主)荒又敏徳	林間つきみ野	就(主)三原信恵
下石神井	就(主)北 紀吉	宇佐美	辞(主)水田雅敏
板橋	辞(主)水田雅敏	尾鷲	辞(主)高橋 順
小倉	辞(主)高橋 順	久居新生	辞(主)高橋容子
板橋	辞(主)荒又敏徳	名古屋新生	就(主)荒又敏徳
新井	辞(主)角田 潤	高田	就(主)寺田仁計
池袋西	就(主)寺田仁計	新井	就(主)森言一郎
日本聖書神学校	就(主)白砂千衣子	池袋西	就(主)白砂千衣子
信濃町	就(主)菅原義久	新井	就(主)菅原義久
新松戸	就(主)津村一志	池袋西	就(主)津村一志
下石神井	就(主)細川良枝	江古田	就(主)末留英夫
江古田	就(主)末留英夫	上富坂	就(主)石丸泰樹
板橋	就(主)石丸泰樹	小倉	就(主)山畑 謙
桜美林	就(主)丸山和則	板橋	就(主)丸山和則
学生キリスト教友愛会	就(主)野田 沢	板橋	就(主)野田 沢
成瀬が丘	就(主)野田 沢	成瀬が丘	就(主)野田 沢
新栄	就(主)梅田正二	新栄	就(主)梅田正二
富山新庄	就(主)北村裕樹	富山新庄	就(主)北村裕樹
愛北	就(主)棟居 勇	愛北	就(主)棟居 勇
大津	就(主)本間敏雄	大津	就(主)本間敏雄
曾根	就(主)網中彰子	曾根	就(主)網中彰子
甲子園二葉	就(主)塩谷直也	甲子園二葉	就(主)塩谷直也
宇部緑橋	就(主)山下智子	宇部緑橋	就(主)山下智子
宇部緑橋	就(主)島 典英	宇部緑橋	就(主)島 典英
宇部緑橋	就(主)川中 真	宇部緑橋	就(主)川中 真

宣教師からの声

祈りに支えられて

グドルン・シェーア

(ジャーマン・ミッドナイト・ミッション《MBK》からの派遣宣教師)

礼式を執り行っています。
一九九三年不思議な神の導きによりまして、西千葉教会に招聘され、現在に至るまで宣教・牧会活動に従事しております。

招聘にあたりまして主任牧師の木下宣世先生に二つのことを課せられました。その一つは、西千葉教会でドイツにあるようなゲマインデ・シュベスター（直訳すると教会看護師）現在の相互ケアの働き（制度を作ること、もつ一つは奉仕活動を西千葉教会にだけではなく、むしろそれを支区内外に広

げということでした。

「大変なことになった。どうしよう？」その時には心配しました。けれども、今、十五年あまりの西千葉教会における奉仕一つ一つを思い起こしてみると、木下先生のあの時の期待の確かさを有り難いほどよく分かります。木下先生の具体的な期待は、わたしの使命にぴったり合致していました。先生は長い間の牧会経験を通じてわたし自身よりわたしに与えられている可能性をよく分かっていたらしく、ということなのです。今振り返ってみますと、わたしは真に幸せな年月を教会員と共に過ごさせて頂きました。

西千葉教会では教職は三人体制で教会の業に励んでいます。週に四回朝の教務打ち合わせ会を行い、共に聖書を読み、担当する礼拝及び諸集会や教会員の消息を確かめ合い、そして共に祈って出発致します。

木下先生は教会の働きの他に週に三回位教団や教会や諸社会福祉事業の働きで出張しています。宣教師も家庭集会の他、千葉支区内

や他教区の諸教会の様々な依頼を受けて出張しております。真に忙しい生活をしております。

けれども朝の教務打ち合わせ会における祈り、このような霊的な交わりは忙しい毎日の歩みの力の源となります。これなしには宣教師として何も出来なかったと思います。深く感謝致します。

もう一つ感謝すべきことは、西千葉教会の会員が我々教職のために忠実に祈りを捧げていることです。この祈りの証人があるからこそ様々な働きが成功することが出来ました。

相互ケア制度が昨年十周年を迎えました。高齢化が進む中で教会が何をなすべきであるかということに常に考え合い、現在は六三名のボランティアが与えられています。この制度は日本の多くの教会にも注目されています。宣教師は種を蒔いただけです、けれどもそれが実際に動き始めたのは祈っている教会員のお陰でした。

来る八月三十一日、残念ながら西千葉教会での働きを辞任することとなりました。けれども長い間支えて下さった西千葉教会の会員は更にわたしの今後の働き、即ちMBK ミッションの宣教幹事の責任をサポートする制度を作ってくれました。これはおそらく日本の宣教歴史の中で初めてのケースだと思っています。こうして日本の教会は宣教歴史の新しい章を書き始めています。わたしは感動と感謝をすると共にこれから日本の伝道のために切に祈り続けていきたいと思っています。



西千葉教会教職、左からグドルン・シェーア宣教師、木下宣世牧師、伊藤智副牧師

第 41 回 伊豆諸島連合修養会



五月二〇日～二二日、東京の「高尾の森わくわくピレッジ」で、第四一回伊豆諸島連合修養会が開催された。台風四号の北上で影響が懸念されたが、当日朝には風雨も収まり、東京教区各支区から六〇名（その内伊豆諸島からの参加は九名）が集まって予定通り開催することができた。

今回は講師に四国から小島誠志牧師をお迎えして、「神の言によって生きるー生活の中に働く御言」をテーマに、まず開会の講演を聴いた。

小島牧師は、マタイ10章1～23節をテキストに、「終末に向かって生きる」と、終末を生きるキリスト者の有り様について語られ、「礼拝する者が伝道する者」「伝道の場はまず生活の場。そこで、弱さをもった自分が何に支えられて生きているかを示していく。それが証し、伝道」時間ができたら、十分に学び準備ができたら伝道しようでは、いつまで経ってもできない。今あるままの姿でよい。必要なものは神が備えてくださる「伝道は神との平和をもたらす働き。平和をもった一人の存在が、家庭の中に社会の中に平和を拡げていく者として用いられる」など、励ましの満ちたメッセージが語られた。講演の後「アメージンググレイス」や「波浮の港」などハートフルな演奏もしてくださり、修養会は一気に盛り上がった。その後、小グループに分かれて分団を行い、講演を聴いた感想や愛唱の聖句を紹介して自己紹介を行い交流を深めた。

伊豆諸島には教団の教会・伝道所が五つある。伊豆諸島連合修養会は、他の教会と交わる機会の少ない島の教会が、互いに励まし合うために会場を持ち回りにして行われてきたが、近年は島の課題を共有して下さる教区内の有志が大勢参加されることもあり、五年おきくらいに都内でも開催されている。終末を生きる信仰者たちが互いに励まし合うために、神は小さな島の教会を用いてくださる。それを深く心に刻まれた修養会だった。

(竹井真人報)



白井キヨ子さん

母の信仰を胸に



1926 年 10 月 5 日生まれ。秩父教会役員。

「突然警察署から警官があらわれた。その頃風説には各教会（ホーリネス）へ入り込んで取りしらべられているときいた。秩父教会へも取りしらべがあるものだと思いがまをえているものの、はたして誰にくるかわからない。最早目の前に来一矢がこちらに向かっている。明朝午前八時に秩父警察署に出現するように言い残して帰って行った。当時（一九四〇年）七月七日」と、今は亡き母の遺稿を読み上げるご婦人の姿に出会った。

第二次大戦下、日本基督教団の六部九部が厳しい弾圧を教職も信徒も受けたことは旧知の通りである。しかし、その弾圧をお聞きする機会は、なかなか無

い。しかも戦後六十数年という時間が重くのしかかるが、絶対に風化させてはならない。遺稿を読み上げる白井キヨ子姉が弾圧を受けた際は、青年期であり、遺稿に記される母の信仰を見て成長された。激動の時代であったが、日曜学校でさんびかやクリスマス劇が楽しかった事を思い出される。

一九四二年クリスマスに教会の青年、同級生五名と一緒に浜野牧師より洗礼を受けた。母の信仰を見て育ったので、疑うことなく素直に神信仰を受けとめられた。その信仰の仲間達は、秩父教会を始め、各地で教会を支えていると、お聞きした。子

六月二二日の神奈川教区を除いて、その他の教区総会が終了した。私も問安使として幾つかの教区を廻らせて戴いた感想として、二三年前の「コラム」に書いたことであるが、その時以上のことを感じざるを得なかった。

例えば、分科会方式をとる教区もあれば、全議案を全員で審議する教区もあり、これらは議事運営の多様性として理解できる。しかし、准允式や按手礼式の違いは、果たして多様性と言えるのだろうか。

具体的には、誓約時に、式文中さらに、按手の時に「教師は前

教区の多様性……

の「…信仰告白、教憲・教規に従い（補教師）」、「…教会の規範に従って（正教師）」を省くのである。つまり、A教区では「教憲・教規や規範に従う」と誓って教師の

に」と告げて、按手を実施した教区もあった。つまり、「教師」だけでは補教師も按手に加わる可能性があるの

（教団総会副議長 小林 眞）